

2015年3月29日 棕櫚の主日礼拝

説教「キリストの十字架」

マタイの福音書 27章 45-56節

【十字架の驚き】

キリスト教会は、二千年の間、十字架を思い巡らし、語り・聴き続けて来ました。しかもそのたびごとに、いつも驚き続けてきました。

主イエスは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(46)と叫ばれました。神である主イエスが見捨てられてしまいました。一体である父と子の間が、断ちきられてしまったのです。人間の父と子であれば、断絶ということも、よくあること。けれども、三位一体の神の断絶というのは考えることができないこと。そんなことがあったなら、この世界の成り立ちそのものが崩れてしまうようなことが起こったのです。

それは、私たちのためでした。神さまが私たちのために、犠牲を払ってくださいました。その犠牲は、どんな言葉でも言い表すことのできない大きな犠牲。そんな犠牲を払ってくださったのでした。

主イエスが息を引き取られたとき、「神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた」(51)とあります。この神殿の幕は、神と人とを隔てる幕。主イエスが父から断ちきられたときに、この幕が裂け、私たちと神さまの断絶が回復されました。このとき裂かれたのは、神殿の幕だけでは

なかったことを忘れてはなりません。私たちが聖餐のたびに思い起こすように、御子のみからでも裂かれたのでした。

【私たちの罪のために】

キリストの十字架は私たちの罪のため。罪とは何でしょうか。ある人が「罪とは神をわずらわせることだ」と言っています。

主イエスの十字架の日、エルサレムでは、神さまをわずらわせる多くの罪が犯されていました。主イエスを訴えた祭司長や長老たちのねたみ、十字架刑を要求し続けたユダヤ人たちの群衆心理、主イエスに罪がないと知りながら暴動を恐れて正しい裁きを曲げたピラトの不正、ローマの兵士たちの残酷、そして主イエスを見捨てた弟子たちの裏切り。けれども、主イエスはだれもお責めにはならず、黙ってすべての罪を引き受けてくださいました。十字架に関係した人々の罪ばかりではなく、私たちの罪もすべて、引き受けてくださいました。

神さまは愛そのもののお方ですから、愛以外のすべてのことは、神さまをわずらわせます。果たして、私たちのすることで神さまをわずらわせないことがあるのだろうか、と思わされます。私たちには、罪があるのです。正しいことをしようとするのだけれども、いつのまにか、怒りのとりこになってしまう。忍耐強く耐え忍ぼうとするのだけれども、自分をあわれむ思いにとらわれてしまう。そうして愛を忘れてしま

う。神さまをわずらわせることになってしまう。こうして、罪は、どこからでも入りこんでくるのです。

けれども、良い知らせがあります。ルターは、「幸いなるかな、罪よ」と言いました。私たちの罪は、御子イエスの十字架によって覆われています。私たちは、神さまをわずらわせるけれども、神さまはとことん、わずらわされてくださる。どんなに私たちの罪が深くても、もうわずらわされるのはやめだ、とはおっしゃらない。私たちが、自分の罪に気がつけば気がつくほど、どこまでも愛してくださっている神さまの愛の深さに気づくのです。

【キリストの十字架】

「神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い」(40)とののしられても、主イエスは、十字架から降りることはなさいませんでした。それは、主イエスには、ご自分よりもだいじなものがおありだったのです。それはなんと、私たちでした。

この主イエスの愛を知った私たちは、平気であることはできません。主イエスのお求めになるただひとつのことに夢中になるのです。それは愛すること。神さまを愛し、互いに愛することが、私たちの一番の願いとなっています。私たちがすでにそのような者とされていることは、ほんとうの奇蹟です。キリストの十字架の奇蹟なのです。